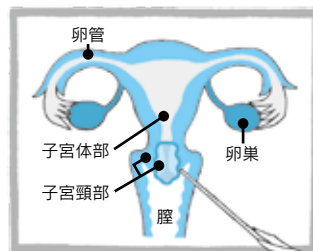


# 子宮頸がん

検診の  
スズメ



子宮がんには、子宮頸がんとう子宮体がんがあります。子宮頸がんは子宮の入り口の子宮頸部で発生するがんで、子宮体がんは胎児を育てる子宮体部で発生するがんです。子宮頸がんは発見されやすく、また早期に治療すれば予後のよいがんです。しかし、進行すると治療が難しいため早期発見することが重要です。

## ウイルス感染が原因に

子宮頸がんの発生には、ヒトパピローマウイルス（以下 HPV）の感染が関わっていることがわかっています。HPVは性交渉で感染しますが、多くの場合はがんになる前に排除されます。しかし排除されず長期間感染が続くとがんの発症につながります。HPVの感染を予防するワクチンがありますが、ワクチンを接種しても検診を受けることは必要です。また喫煙も、子宮頸がんの危険因子であることがわかっています。



### 子宮頸がんの危険因子

- HPV の感染
- 多産
- HPV 以外の性感染症
- 喫煙
- 経口避妊薬の使用

## 若い人で増えている子宮頸がん

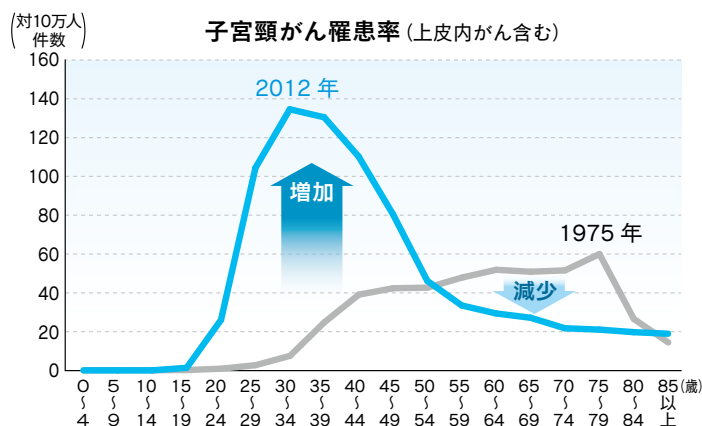
子宮頸がんの発症は、30歳から40歳がピークです。50歳以降では減少している一方、20歳代・30歳代で増加しています。

子宮頸がんは、がん細胞に進行する前の異形成という状態を経てがんになることがわかっています。子宮頸がん検診では、症状がない異形成の段階で発見することが可能です。

20歳から30歳代は結婚・出産の年齢層であり、子宮温存が可能な早期のうちに発見することが大切です。

正常 ▶ 異形成 ▶ 上皮内がん ▶ 浸潤がん

▲検診を受ければこの段階で発見できる



国立がん研究センターがん情報サービス「がん登録・統計」

## 子宮頸がん検診を受けて早期発見を!

～子宮頸がん検診とは?～



子宮断面  
綿棒やブラシなどで頸部の細胞をこすり取る

再検査や精密検査が必要といわれたら必ず受診しましょう

国では、20歳以上の女性に2年に1回、細胞診による子宮頸がん検診を受診することを推奨しています。子宮頸がん検診は、子宮頸部の細胞を綿棒やブラシなどでこすり取り、顕微鏡で調べる簡単なものです。上皮内がんなど、早期の段階で見つければ、子宮を温存した治療が可能です。

「医師採取」と「自己採取」が選べる場合は、「医師採取」での検査が確実です。

### HPV検査

細胞診のほか、ウイルスの有無を調べる HPV 検査もあります。HPV には多くの型があり、がんのハイリスクとなる型の感染を調べる検査です。国が推奨する検査にはなっていませんが、子宮頸がん検診とあわせて受診すると安心です。

### 子宮頸がん予防ワクチン

子宮頸がん全体の50～70%の原因とされる HPV「16型」と「18型」を予防するワクチンです。すべての型に効果があるわけではないため、ワクチンを接種しても子宮頸がん検診を定期的に行うことが大切です。接種をするかどうかは医師とよく相談しましょう。